六篠会報

第7号
発行
神戸市灘区六甲台町一
神戸大学農学部内
六篠会（りくそうかい）
（神戸大学農学部同窓会）
印刷　わかばやし印刷

開学四十周年に当って

六篠会会長　西川欣一

昭和から平成へ、激動の昭和を歩みつづけた農学部は、本年五月十五日に神戸大学全学合同の四十周年記念式典を執り行いました。

わが神戸大学農学部の前身である兵庫農科大学が丹波篠山の地に創設されたのは新制大学発足の昭和二十四年五月でありました。当時わが国は食糧難の時代で「農は国の基なり」と食糧増産が叫けばれていたわけですが、今日飽食の時代と云われ、農学部に対する社会の期待も、バイオ時代における人類の食糧と、地球レベルでの環境問題を担当する生物産業科学部へと変化しております。

ここで、開学以来四十年間の同窓会の歩みを振りかえりますと、昭和三十年第二回生が卒業した年に第一回生が中心となって同窓会を創設し、以後神戸大学農学部に国立移管するまでは、各学科別の活動が中心で、同窓会名簿の発行が最大の業務でした。昭和四十一年四月、神戸大学農学部一回生入学、同四十二年十月、六甲台新学舎への移転。同四十四年三月、兵庫農大第十七回生（最終）の卒業式に当り、同窓会は農大と農学部の一本化を予定しておりましたが、大学紛争の激化でおくれ、開学二十五周年の昭和四十九年五月になって、農大、農学部を一本化した現在の『六篠会』が誕生しました。

開学三十周年には、六篠会学術振興基金の設立、農学部30年の歩み写真集の刊行を行ないました。

▲　式典後の祝賀会（於 経済学部・経営学部前庭）

開学三十五周年には、母校発祥の地、篠山の旧農大跡地に『我等が青春ここにあり　六篠会』ときざまれた記念碑を建立しました。そして本年五月には、ここに開学四十周年を迎えたわけであります。

以上のように従来は六篠会単独の事業でありましたが、今回開学四十周年記念式典は、ようやく機が熟し、神戸大学全学合同の記念式典となりました。

去る五月十五日(月)、午前十時三十五分から六甲台講堂において、神戸大学開学四十周年記念式典が挙行されました。

この式典には、各学部の同窓会役員、名誉教授、学内教職員代表及び学生代表等約四百名が出席し、斉藤教育学部長の開式の辞につづいて、新野学長の式辞、大谷凌霜会理事長、加藤名誉教授の祝辞、グリークラブ学生の歌唱があり、午前十一時半終了しました。式典後医学部西塚教授により「自然に教わり人に学ぶ」と題する記念講演があり、引きつづき、六甲台前庭で懇親会が催され四十周年記念行事は終了しました。

なお、四十周年を出発点として五十周年へ向って次の事業が計画されています。

一、神戸大学新制五十年史（写真集、前史、通史、部局史）の刊行。
二、国際交流基金の設立。
三、国際学術交流会館用地の購入
四、神戸大学出版会の設立

今後、五十周年記念事業が順次展開されることと存じますが、六篠会員皆様方の全面的なご支援をお願い申し上げます。

＊　＊　＊

同窓会の役割は、第一に情報交換と同窓生の親睦です。会報や名簿の発行は、それによって母校の現状や会員の活動状況が知らされ、ある人は直接仕事に結びつく人間関係を得ることもあるでしょうし、同窓会が母校とのパイプ役を果すことにもなります。

同窓会のもう一つの大きな役割は母校に対する協力援助です。わが六篠会も事業費や、学術基金によって、平成元年度では、学部援助費をはじめとして、学術講演会援助費、自然科学図書館への図書寄贈、海外公費出張教官への餞別、卒業パーティ援助費、退官教官への記念品贈呈等、毎年四月下旬に開催しています六篠会役員総会の議決のもとに農学部への協力費の支出を行っており、その援助範囲も次第に拡大していることを報告しておきます。

なお、開学四十周年に当たり計画しました六篠会名簿（新野学長の挨拶文掲載の創立四十周年記念号）の発行につきまして多くの方々にご協力いただいておりますことを感謝しております。最初の予定では去る三月中には完成させる計画でしたが印刷担当者の病気で大変遅れてしまい、六篠会本部名簿係でやりなおす結果となり、多大のご迷惑をかけておりますことを恐縮しております。八月には発送出来る予定で予約者にはご連絡致しましたが、作業が予想以上に手間取り、更に遅れておりますことを深くお詫び致します。

六篠会員の皆様、社会におけるきびしい道をご精進のこと深く敬意を表しますと共に、ご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

会員の皆様へ

農学部長　名武昌人

昨年九月、水野進先生の後任として学部長に就任し、あっという間に一年が過ぎました。次々に押し寄せる当面の用事を処理するのに追われて、ゆっくりものを考える余裕もありませんでしたが、六篠会からの原稿の御依頼がありました。この機会に、会員の皆様へのごあいさつを兼ねて、農学部の現況などについて御報告したいと存じます。

わが神戸大学農学部も、その前身である兵庫農科大学が昭和二十四年に設立されて以来、同四十二年に神戸大学に国立移管されるという経過を辿りながら、着実にその内容を充実させ、創立四十周年を迎えました。今や五学科二十九講座、附属農場、大学院農学研究科（修士課程・五専攻）をもち、更に理工農学部を母体とする神戸大学大学院自然科学研究科（後期三年の独立研究科博士課程）にも参加する農学部にまで発展いたしました。既に課程博士として昨年度までに二十名の学術博士と二名の農学博士が誕生し、着々と研究成果が上がっております。また卒業生のうちで立派な業績をあげられた四名の方々が論文博士として農博を授与されております。このように皆様の母校が、また出身学部が着実に発展していることを皆様に報告できるのは、私としても大きな喜びであります。同時に、私達教官一同、一層の充実と発展を期してさらに努力しなければならないという大きな責務を感じている次第です。

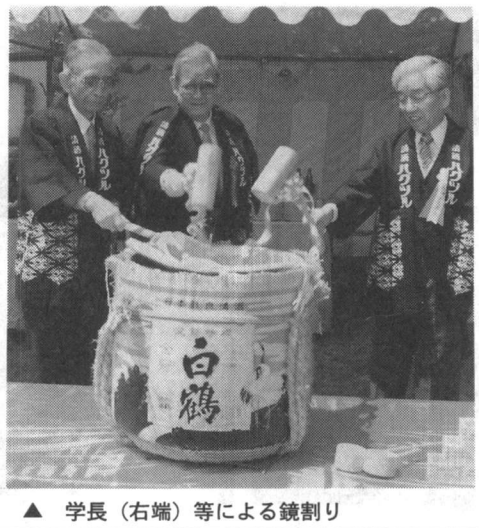
さて、現代の科学技術の進歩はめざましいものがあり、人類社会は急速に変貌しつつあります。農学の分野においても例外でありません。実際に農学は大きく変化しつつあります。わが農学部においても、従来の狭い範囲の農業のみでなく、食生活や人間環境の保全、さらに先端的なバイオテクノロジーの分野に至るまで、研究対象を大きく拡げて、現在努力が積み重ねられております。とりわけ生物生産やライフサイエンスの領域で、バイオテクノロジー的手法を適用する研究を今後ともますます強めてゆきたいと考えております。

一九八十年、アルビン・トフラーはその書「第三の波」において、「かつて第一の波の社会であった封建社会が、産業社会である第二の波の挑戦を受け敗れ去ったように、現在の発達せる産業社会は、人工爆発、食糧危機、エネルギー枯渇、環境汚染など、第三の波の挑戦をうけ、新しい社会にとって代られるであろう。この第三の波の社会では、マイクロコンピューターと、バイオテクノロジーが産業基盤となるであろう。」と予言しました。今やこの予言は十年を経ずして現実のものとなっていることは誰の目にも明らかであります。

このような社会的背景から、生命科学を取りあつかう農学部に対する社会の期待も年と共に増大し、産業界の要望や需要も大きくなってきております。こうした事情は受験生にも敏感にあらわれ、年々多くの優れた受験生がわが農学部を志望してきております。

一方、こうしたなかで、数年来全国の農学部のいわゆる「見なおし」が文部省から強く要求され、すでに十大学（十一学部）が、見なおしに伴う改組を終えております。これらをみますと、一学部を一学科に統合し、三つ位のコースに分ける大学と、一学部を三つ位の学科に統合する大学があります。しかし何れの場合も、大講座制をとり、助手及び助教授の定員を教授に振替えて、教授の数を増やし、一学部を八～九大講座（水産学部系は十二～十三大講座）に分け、一大講座を三～四人の教授と、二～三人の助教授、一人の助手で構成するといったところが多いようであります。このような改組が、時代の要請にマッチしたものであるかどうかは、にわかには判断できませんが、少くとも研究組織としては、教授、助教授、助手を研究・教育の最小単位とする従来の講座制の方がすぐれているように思われます。しかしだからといって改組をしないで、従来の組織のままでよいかといえば、そうともいえない社会情勢下にあるように思います。教官の総意を集めて、神戸大学農学部独自の改革案を考えてみたいと思い、現在準備を進めているところです。

今日までに農学部は、約四千七百名におよぶ卒業生を世に送っております。これら卒業生諸君の社会における活躍が、農学部発展の大きな原動力になっていることは疑いのないところであります。皆様のこれまでと変らないご活躍と、ますますのご発展を心から祈念いたしますと共に、母校に対する一層の御支援と御鞭撻をお願い申し上げる次第です。



▲　学長（右端）等による鏡割り

新制神戸大学開学50周年40周年記念事業について

六篠会幹事長　新家　龍

神戸大学は、昭和二十四年の学制改革により、総合大学として新しく発足し、以来既に四十年が経過した。六甲台の神戸経済大学及び予科の施設を核として、神戸工業専門学校、姫路高等学校、兵庫師範学校・兵庫青年師範学校を統合し、経済学部、経営学部、法学部、工学部、文理学部、教育学部の六学部の他に、経済経営研究所を設けて新制大学に改組された。その後、文理学部から文学部、理学部を分離し、さらに神戸医科大学（医学部、昭三十九）と兵庫農科大学（農学部、昭四十一）を合併して、現在の九学部をもつ総合大学となった。大学院の修士課程は各学部に、また博士課程は経済、経営、法学、医学の各学部に設置されており、さらに、独立専攻の博士課程として、文化学研究科並びに理・工・農学部を中心とする自然科学研究科が設置されている。自然科学研究科に平成元年度から新たに知能科学専攻が増設されて、その斬新性と特異性で注目を集めている。このように、神戸大学は学問の府として名実共に世界の最高水準にまで成長し、学生並びに教職員は活発な活動を続けている。

このたび、新制四十周年の記念すべき機会に、開学記念事業検討委員会が学内に設置（昭六十二）され、種々検討が加えられた。又、昭和六十三年になって、神戸大学開学五十周年記念事業委員会が発足し、委員会規則も制定（昭六十三、七）されて活動を開始し、現在に至っている。筆者は、委員会の一員として参画した立場から、その経過と内容をご報告し、将来その実施に当っては諸兄諸姉の絶大なるご協力を心からお願いしたい。

まず、検討委員会から提出された答申（昭六十三、二）には次の二項目があった。

一、開学四十周年記念事業の推進

(イ) 神戸大学同窓会名簿の発行

(ロ) 神戸大学開学四十周年記念祝賀会の開催

二、神戸大学五十年史の刊行

これら答申について開学五十周年記念事業委員会で検討された結果、次のような実施計画が決定された。すなわち、開学四十周年記念事業については、まず神戸大学各同窓会に新制神戸大学開学四十周年記念号の発行を依頼すること、平成元年五月十五日（創立記念日）には記念式典と記念講演会並びに懇親会を開催することであった。六篠会は、平成元年に同窓会名簿を発行するに当り、会員の皆さんへ新野幸次郎神戸大学長からの挨拶状を掲載すると共に表紙に新制神戸大学四十周年記念号と明記することとした。この様式は各学部同窓会とも同様に行うことになっている。

一方、五月十五日の記念行事は、名誉教授と同窓会役員の出席はあったものの学内の教職員と学生を中心に催された。その概略は次の通りである。

一、神戸大学開学四十周年記念式典
於神戸大学六甲台講堂（10時30分～11時30分）

二、神戸大学開学四十周年記念講演会
於神戸大学六甲台講堂（11時30分～12時30分）
講師　西塚泰美医学部教授（昭和63年文化勲章受賞）
演題「自然から教わり人に学ぶ」

三、神戸大学開学四十周年記念懇親会
於経済学部・経営学部前庭（12時30分～14時）

次に、神戸大学五十年史の刊行については、平成元年四月一日から正式に編集委員会を発足させ、同時に五十年史編集室を設置することによって着々と計画が進められている。以上が神戸大学開学四十周年記念事業の概要である。

一方、平成十一年五月十五日に迎える開学五十周年記念事業については、記念式典等諸行事の実施とその推進計画が現在立案されつつある。その中で最も重要かつ基本となるのは募金活動である。開学記念事業検討委員会から答申された内容には、先に述べた神戸大学五十年史の刊行のほかに、国際学術交流会館の建設、国際交流基金の設立、神戸大学出版会の設立、その他記念式典等諸行事の開催などが含まれている。これらを現在開学記念事業委員会で検討中であるが、それらを実施するのに必要な費用について、大学としての一応の目標額を設定し、募金活動を開始する必要がある。募金活動は、国（機関）が直接行うことが出来ないため、外部で募金団体（後援会）を設置してもらう必要があり、その後援会の構成等についても目下検討中である。募金対象の中には当然本学の教職員も含まれており、卒業生をはじめ企業にも募金をお願いすることになる。

募金の趣意に掲げられると思われるが、国際学術交流を中心に、神戸大学は世界の文化と教育への貢献を通じて社会的使命を果していくという重要課題にとり組んでいる。今後とも、神戸大学の一層の充実発展のために会員諸兄諸姉の絶大なるご援助をお願いしつつ、不十分ではあるが神戸大学開学四十周年並びに五十周年記念事業に関するこれまでの概略のご報告としたい。

神戸大学共同研究開発センターについて

センター長　水野　進

六篠会会員の皆様益々御健壮にて活躍のことと存じます。一昨年五月、新しく設立された共同研究開発センターの所長として就任以来、早くも二年半が過ぎようとしています。お蔭でセンターの運営も軌道にのり、昨今は比較的暇な時間が持てる様になって参りました。

今回、六篠会報発行にあたり、新しく設立された当センターの趣旨、目的等を御理解いただき、諸兄各企業の積極的な参加をお願いいたしたく、筆を取らしていただいた次第です。

まず、本センター設立経過を考えますに、農学部の特色として、輸入農畜産物と神戸港を基盤とした総合的な研究センターを、農学部の付属施設として設置しようと数年前から計画し、教授会の承認を得て昭和六十二年度概算として文部省と折衝を重ねて参りました。ちょうどその頃に臨教審から第二次答申（六十一年七月）がなされ、その中で新しい学問形態として、民間企業との共同研究を主目的とした共同研究センターを作ることの提言がなされていました。それを受けて文部省は、新しい時代に対応出来る研究体勢、すなわち、大学各専門分野の叡知と民間活力の積極的な交流の場を大学に設置することを決めたわけです。従って、最初の総合農学的な施設から、全学的な施設への変更を余儀なくされたわけですが、学長はじめ自然系学部長と相談し、神戸大学にとってもこういう施設を作っておくことは今後の得策ではないかとの結論を得て、本センターが昭和六十二年に発足いたしました。一方、センター施設は同年十一月から農学部構内に建設が進められ、同六十三年五月二十四日には竣工式も行なわれ、本格的な活動にはいっています。

文部省は、昭和六十二年度に本学、富山、熊本の三大学を設置校に選び、更に六十三年に五校、平成元年にも五校を対象に民間機関との共同研究を推進し、社会への要望に答えることとしており、こうした研究体制は今後益々注目されることでしょう。

現在、本センターでは地域と連携したバイオテクノロジー、食品工学、環境科学、新素材、メカトロニクス、医療関連分野の研究開発につき、神戸大学の特色をいかし、日進月歩の技術革新に対応するとともに、地域産業の活性化に貢献するべく、次の様な事業計画を行っています。

1、学内及び他大学との共同研究、2、民間機関及び公的機関等との共同研究、3、民間機関等技術者に対する高度技術教育・研修、4、民間機関等への学術情報の提供、5、外国人研究者等との学術研究、6、大学院学生に対する実際的な応用教育・研究。

施設関係については、建物総面積約一一〇〇㎡、一階は、地域の要望の強いバイオテクノロジー、食品に関する研究を主体に考え、P2、RI研究室、高分解能超伝導核磁気共鳴装置室を主体に、二階には各種分析機器、更に小動物飼育室をもうけ、生物学中心の先進学問・技術開発に対応出来るように整備しています。

本センターの構成メンバーは、センター長（兼任）、専任助教授一名（現在、前農学部助教授土田広信）、客員教授三名（私立大学一名、県立研究機関一名、企業一名）と不十分ながらも、農学部事務部の協力により、その運営にあたっています。

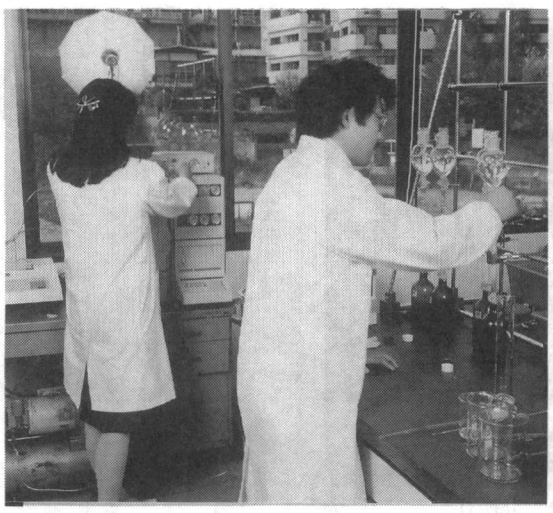
昭和六十三年度の共同研究実施状況は、農学部関係五件、工学部関係一件、医学部関係二件であり、すでにパテント申請するプロジェクトもあり、着々とその成果をあげています。

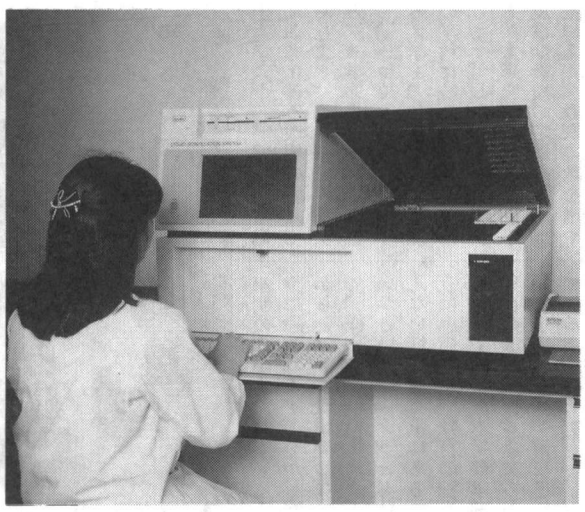
最初に申しあげました様に、本学におけるセンター設立の基盤が、農学部で考えた「輸入農畜産物・港湾施設開発センター」であったことより、現在は勿論、将来とも農学、生物学主体のセンターとして、他大学に設立された工学主体のセンターとの特色を持たしたいと考えています。幸にも六篠会員の皆様は、本センターの意図する関連企業で御活躍の方々です。皆様方の御協力により、神戸大学共同研究開発センターが益々発展すると共に、企業更には社会に貢献出来ることを願っています。尚共同研究についての御相談は当分の間、農学部庶務掛（Tel 〇七八-八六一-三三一 内線四三四 FAX 〇七八-八六七-八四五〇）にお願いいたします。

最後にあたり、六篠会の一層のご発展と会員の皆様の御健康にてのご活躍と益々のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

▲ 共同開発センターと農学部

▲共同開発センター玄関





名簿発行についてのお詫び

名簿の発行が当初の予定より大幅に遅れておりますことをお詫びいたします。只今印刷中でございますので今暫くお待ちいただくようお願い申し上げます。

名簿係

丹波篠山から六甲台への回顧と県六篠会の歩み

県六篠会会長　田中平義

昭和の時代が終り平成元年を迎えた。創立以来四十年になるが開学当時の丹波篠山での学生生活を思いおこす。当時の社会経済事情は戦後の鎚音が高く響いていた時期でもあり、その中でも記憶に残るのは、GHQの覚書で1$三百六十円の単一為替レートになったこと、また戦後の経済政策の根幹をなすシャープ勧告が発表された年でもあった。

一方、日本の先端学術の優秀さが戦後の世界に認められ、ノーベル物理学者が誕生した。このようなメモリアルな過渡期に兵庫農大が開学した。学舎は旧連隊の兵舎を改造したもので、つわものどもの夢の跡が忍ばれた。教授陣はすばらしい方々ばかりで戦後台湾の旧帝大からの帰還者が多かった。なかでも私の直接の恩師でもあった佐伯先生は、クリスチャンで深遠な人柄の紳士であり、ひなびた篠山の城下町のたたずまいを今でも思いおこす。昭和二十八年第一回生の卒業当時は企業等も人員整理をする不景気な時期でした。就職も困難で容易に定まらず当時の先生方のご苦労がしのばれます。私も創立以来卒業生第一号として県職員となり専門職を生かすべく農業試験場に勤務した。以後三十六年の歳月を経たが現在県六篠会は総員百四十八名の会員になった。兵庫農大卒十七回で五十七名、神大卒十九回で九十一名である、兵庫農大卒のうち農林水産関係三十名で研究職二十二名（内農業十六名）県庁十六名、土地改良五名である。神大卒のうち農林水産関係八十二名で研究職二十二名、土地改良十八名、普及職十七名、県庁十八名である。全会員の職区分のうち行政職五十七％、研究職二十九％、普及職十四％を占めている。このように県六篠会の会員が県行政の主要ポストに着き行政、研究、普及等の各部門で活躍し住みよいふるさとつくりに努力している。県六篠会は年一回総会を開いている。六十三年度は十月二十二日に食と緑の祭典がおこなわれた丹波篠山町の国民宿舎篠山荘で開催した。当日は新農学部長の名武先生、西川会長、新家幹事長の出席のもと新しいふるさと創りがされている篠山をみながらの総会であった。年々会を重ねる度に新会員が増えてくることを期待している。歳月は人を待たずと申しますが兵庫農大卒業生の中にも現役から退いたり還暦を迎える人達もこれから出てくる、人はそれぞれ歳月の切符を持って旅をし年を重ねてゆくものであるが、一般社会通念からすれば、農学部もようやく四十才の中年になったと認められるようになっただけに神戸大学六篠会の活動も今後新たな節目のスタート起点として、更に意義あるものにしたいものである。

▲ 県六篠会総会後の親睦会

KOBE六篠会から

KOBE六篠会会長　鍋山郁夫

平成元年二月十日、神戸・金龍閣において、名武農学部長、丹下教授、上山教授、本部から西川会長、新家幹事長をお招きし、第四回目の総会懇親会をなごやかに、かつ盛大に開催致しました。先生方からは、社会に開かれた大学、最先端バイオ技術など最新の大学研究活動のご紹介等があり、又会員達ではそれぞれ違った職場での苦労話や、学生時代の思い出話に花が咲きました。

私達のKOBE六篠会は神戸市役所及び市立高中小学校に勤務する職員で構成されており、現在八十四名です。内訳は教職関係が二十八名（小学校勤務四名、中学校勤務二十名、高等学校勤務三名、養護学校勤務一名）行政職関係が五十六名（衛生局十九名、環境局十一名、農政局八名、土木局五名、緑農開発公社三名、園芸振興基金協会三名、住宅局二名、下水道局・港湾局・兵庫区・水道局・交通局各一名）です。まことに神戸市行政の巾広い分野で職務を行っております。従前は、それぞれの職場において、小グループの同窓会の集まりや、新人歓迎会などはあったようですが同窓生が一堂に会しての集まりはありませんでした。

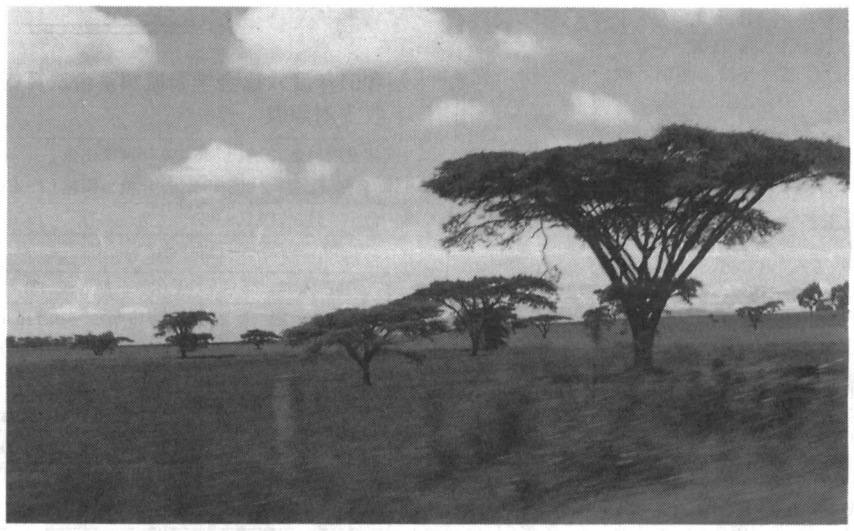
去る六十年六月大学時代同期の農大四回生中谷氏、後輩である農大十六回生西尾、神大1回生の中村の両氏と久しぶりに旧交を暖めた時、「一度本市職員の同窓会を開いてみては」と意気投合し、西尾、中村両氏が同窓会発足にむけて走りまわることとなりました。そして更にこのメンバーに農大十回生の古家・小山、十三回生の杉本、神大一回生の木股・岡、神大四回生の菅原の各氏が参加して準備をすすめ、昭和六十一年二月十四日神戸金龍閣で、念願のKOBE六篠会を発足させることができました。本会の役員としては、第一回総会において

会　長　鍋山郁夫（環境局）
副会長　平山国治（摩耶兵庫高校）
副会長　中谷吉実（緑農開発公社）

が選出されました。以来毎年2月中旬には、総会および懇親会を開催し、会員の親睦を図ってまいりました。

今後の活動としては、仕事を通じて又、懇親会の場を通じて、会員のコミュニケーション、情報交換や親睦をはかっていくこと。大学及び神戸大学農学部六篠会本部との連携をより緊密にし、最先端の学問、知識を仕事に生かしていくこと、又他都市の同窓の人達とも交流をはかっていくことなどを考えております。

若い世代も毎年入会してきています。彼らが働きやすいように、又旺盛な研究心をいつまでも持ち続けられるよう、そして新しい仕事に積極的にとりくめるようにこのKOBE六篠会がバックアップできればと願っております。



アフリカの若い友へ

＝農産機械学講座＝

豊田浄彦

出身地は？
卒論のテーマは？
卒論とこの国の自然環境との関係は？

大学から宿舎のホテルに帰る途中、私の留め処のない質問に君は悪怯れず答えてくれた。つい先程まで面接の結果が思わしくなかったためか、元気がなかったのに、……。話すうちに徐々に瞳が輝きはじめ、このアフリカの国の人に共通な陽気さと若者特有の希望に満ちた表情を取り戻したようだった。

乾期に入り、一面に黄色くなった草原のハイウェイを時速百キロ程で走る車中、君の話を聞きながら、この国の発展は、君のような希望に胸ふくらませた若者にこそ期待できると感じた。

まだ、アフリカから帰国して半年しか経たないのだが、私にはもっと遠い過去の情景のように感じる。

君の国はアフリカ大陸の東側、あの「アフリカの角」の南方に位置し、東はインド洋、西はビクトリア湖に面している。ソマリヤ、エチオピア、ウガンダ等と国境を接し、東アフリカでは飢えを知らず、経済的、政治的に最も安定した国だ。しかし、開発途上国の抱える共通の悩みを持っている。

三月に日本から着任して以来、ホテルと大学の往復の毎日だったが、街の様々な風景や新聞から色々な事情を知った。多部族から成る多様な国民、急激に進む近代化による混乱、貧富の拡大、街に溢れる輸入製品に対し膨れる人々の欲望。

大学がレジャーランドと呼ばれる飽食の国から来た者には解決の困難さのみが際立って見えた。

しかし、君は明るかった。これからの国の発展を信じて疑わないようだった。

大学の私の同僚専門家が現地スタッフ充実のため、大学新卒者を対象に採用活動を行った。その結果、君をはじめ幾人かが応募し、やっとのことで面接に至ったのだ。

平均寿命が五十歳と云われるこの国で、部族長老支配の名残とも思える年長者による伝統的体制は、アメリカン・ドリームのような可能性を君達若者に与えはしないかもしれない。しかし、曽ての近代日本の国家形成時のように、君達の一日一日の努力が国の発展を着実に築くことになるだろう。

君が車を降りる際、「I LIKE YOU。」と言ったのは、私には思いがけなかったが、面映ゆくも、今日明日の目先の利益に汲汲としている年配スタッフ達に希望を見出せなかった私の気分を幾分か救ったようだった。

また、いつか成長した君に会える日を期待したい。

庶務報告

▼役員会報告

昭和61年4月26日
昭和61年度定期役員会
於　バーグ
○昭和60年度経過報告ならびに会計決算報告・会計監査報告
○昭和61年度役員選出
○昭和61年度事業報告
○昭和61年度会計予算
以上について審議され、予算案について一部修正し、原案通り承認。

昭和61年5月12日
学内常任幹事会
於　農学部
○六篠会学術振興基金の運用の件
○第2回国立農水産関係大学総合大学院協議会の開催の件
以上について審議した。

昭和62年2月4日
学内役員会　於　KUC
○昭和61年度卒業祝賀会に50万円援助の件
○昭和62年度新入生入会金の件
以上について審議、決定した。

昭和62年4月27日
昭和62年度定期役員会
於　KUC
○昭和61年度経過報告ならびに会計決算報告・会計監査報告
○昭和62年度役員選出
○昭和62年度事業報告
○昭和62年度会計予算
以上について審議され、原案通り承認。

昭和63年1月19日
臨時役員会
於　ランスボックス
○KUC講演会の講師を保田茂氏に依頼の件
○共同研究開発センター竣工に伴なう行事に六篠会から経費支出（30万円援助）の件
○40周年記念行事の計画の件
以上について審議、決定した。

昭和63年4月14日
学内常任幹事会
於　農学部
昭和63年度定期役員会にむけての議案書作成について審議した。

昭和63年4月26日
昭和63年度定期役員会
於　KUC
○昭和62年度経過報告ならびに会計決算報告・会計監査報告
○昭和63年度役員選出
○昭和63年度事業報告
○昭和63年度会計予算
以上について審議され、一部修正し原案通り承認した。

なお、昭和64年度にむかえる40周年事業の一つとしての名簿発行について、その予算措置の扱いに意見交換を行った結果、幹事長、名簿担当幹事にその取り扱いを一任することにした。

平成元年1月23日
常任幹事会
於　ランスボックス
○神戸大学開学40周年記念式典（5月15日）の件
○凌霜会主催懇談会出席および卒業生への証書筒贈呈の件
○卒業生への記念品贈呈の件
以上について審議された。

平成元年4月20日
学内常任幹事会
於　農学部小会議室
○平成元年度新入会員の報告
○名簿および会報の発行の遅れについての報告
○神大40周年記念行事分担金支出の件
○昭和63年度決算の件
○六篠会役員の代議員制度について検討する件
○平成元年度役員交替の件
以上について審議された。

平成元年4月28日
平成元年度定期役員会
於　ランスボックス
○昭和63年度経過報告
○昭和63年度会計報告
○平成元年度役員選出
○平成元年度事業報告
○平成元年度会計予算
○その他
以上について審議され、原案通り承認。

平成元年6月6日
学内常任幹事会
於　ランスボックス
○当面の諸問題について（名簿、会報の発行の遅れ、その他）
以上について審議された。

平成元年9月8日
学内常任幹事会
於　ランスボックス
○名簿、会報の発行に関する件
○その他
以上について審議された。

▼六篠会学術振興基金運営委員会報告

昭和61年5月22日　於　KUC
六篠会学術振興基金の運営について審議の結果、次のことを決定した。
一、50万円の予算をもって運営する。
二、国際学術交流の公的海外出張者について左記ランクに従って援助する。
A、5万円、出張期間6ヶ月以上
B、3万円、出張期間2ヶ月以上
C、1万円、海外で開催される国際学会において発表する場合
① 申込は別紙様式により本人が申請する。
② A、B、C各ランクともに、同一年度内、1人1回に限る。
③ 学部教官に限る（当面の間）。
三、将来計画として左記のようなものが考えられる。
イ、航空運賃の片道運賃を援助
ロ、研究助成
ハ、研究費の貸付制度

▼農学部主催講演会を後援

昭和63年7月1日に、農学部主催講演会が講師に兵庫県三原郡農協農政推進室長古東英男氏を迎え、「国際化時代における地域農業振興と指導者の役割」という演題で催され、六篠会が後援・援助した。

▼六篠会会計幹事
永吉照人氏送別会

平成元年4月20日
於　農学部小会議室
昭和62、63年度会計幹事をして下さった永吉照人氏（農学部植物防疫学科助教授）が、4月1日から兵庫県教育委員会（兵庫県立自然博物館準備室）に移動されましたので、慰労会を兼ねた送別会を六篠会学内幹事でもちました。

平成元年度六篠会役員

会長　西川　欣一（A1）
副会長　東　順三（C1）
〃　久下　平（C1）
〃　田中平義（C1）

常任幹事
幹事長　新家　龍（C5）
庶務　高橋竹彦（C13）
会計　三十尾修司（A神6）
会報　山形裕士（C神5）
名簿　津川兵衛（A11）
監事　王子善清（C12）
〃　切貫武代司（K1）
〃　久保一兵（C2）
〃　山口禎（A1）
〃　石田陽博（A2）
〃　能宗康夫（C2）
〃　前川進（A3）
〃　鍋山郁夫（A4）
〃　藤井聰（C5）
〃　北浦義久（A6）
〃　氷上雄三（Z6）
〃　植田武彦（A7）
〃　酒井進（C7）
〃　山内脩（A9）
〃　杉原一三（Z9）
〃　竹内正（A10）
〃　中田昌伸（C10）
〃　岸原士郎（C10）
〃　岡沢秀晃（Z11）
〃　河南保幸（Z11）
〃　山本博昭（A12）
〃　辻荘一（Z12）
〃　内藤親彦（A13）
〃　永吉照人（A13）
〃　脇内成昭（C15）
〃　上垣豊（C16）
〃　西尾司（Z16）
〃　中村直彦（Z神1）
〃　寺井弘文（A神2）
〃　山木和人（T神4）
事務局　江口庸平
KUC運営委員：西川　欣一
新家　龍
酒井　進
神戸大学KUCブライダル・センター委員：酒井　進

会　計　報　告

昭和61年度六篠会学術振興基金決算報告書
収支対照表

前年度繰越金	16,715,526	本年度支出金	210,000
本年度入金	2,993,494	次年度へ繰越	19,499,020
合計	19,709,020	合計	19,709,020

収入の部	予算額	決算額
前年度繰越金	16,715,526	16,715,526
一般会計より繰入れ	2,000,000	2,000,000
寄付金	1,000	0
預金利子	600,000	993,494
合計	19,316,526	19,709,020

支出の部	予算額	決算額
海外渡航援助費	500,000	210,000

監査の結果誤りのないことを認める。
昭和62年4月17日
切貫武代司 ㊞
久保一兵 ㊞

六篠会昭和62年度一般会計決算報告書
収支対照表

前年度繰越金	1,303,995	本年度支出金	4,351,985
本年度入金	4,374,748	次年度へ繰越	1,326,758
合計	5,678,743	合計	5,678,743

収入の部	予算額	決算額
前年度繰越金	1,303,995	1,303,995
入会金	4,200,000	4,330,000
預金利子	34,000	39,438
雑収入	5,000	5,310
合計	5,542,995	5,678,743

支出の部	予算額	決算額
農学部活動援助費	300,000	500,000
一般事業費	1,500,000	505,000
一般事務費	800,000	657,705
会議費	150,000	104,820
旅費	100,000	30,430
慶弔費	200,000	104,280
神大学友会経費	150,000	149,750
学術振興基金	2,000,000	2,000,000
予備費	342,995	300,000
合計	5,542,995	4,351,985

監査の結果誤りのないことを認める。
昭和63年4月12日
切貫武代司 ㊞
久保一兵 ㊞

六篠会昭和63年度一般会計決算報告書
収支対照表

前年度繰越金	1,326,758	本年度支出金	5,914,600
本年度入金	6,549,833	次年度へ繰越	1,961,991
合計	7,876,591	合計	7,876,591

収入の部	予算額	決算額
前年度繰越金	1,326,758	1,326,758
入会金	4,800,000	4,980,000
預金利子	40,000	64,403
特別会計より	1,500,000	1,500,000
雑収入	5,000	5,430
合計	7,671,758	7,876,591

支出の部	予算額	決算額
農学部活動援助費	500,000	500,000
一般事業費	1,600,000	885,500
一般事務費	800,000	549,170
会議費	150,000	95,360
旅費	100,000	25,200
慶弔費	450,000	293,370
神大学友会経費	150,000	66,000
学術振興基金	2,000,000	2,000,000
名簿製作準備金	1,500,000	1,500,000
予備費	421,758	0
合計	7,671,758	5,914,600

監査の結果誤りのないことを認める。
平成元年4月17日
切貫武代司 ㊞
久保一兵 ㊞

昭和60年度六篠会学術振興基金決算報告書

	予算額	決算額
前年度繰越金	14,656,201	14,656,201
一般会計より繰入れ	1,700,000	1,700,000
寄付金	1,000	0
預金利子	600,000	359,325
合計	16,957,201	16,715,526

監査の結果誤りのないことを認める。
昭和61年4月16日
切貫武代司 ㊞
久保一兵 ㊞

昭和60年度一般会計決算報告書
収支対照表

前年度繰越金	1,728,225	本年度支出	5,251,182
本年度入金	4,342,850	次年度へ繰越	819,693
合計	6,071,075	合計	6,071,075

収入の部	予算額	決算額
前年度繰越金	1,728,225	1,728,225
入会金	4,200,000	4,230,000
預金利子	30,000	66,650
雑収入	1,000	46,200
合計	5,968,225	6,071,075

支出の部	予算額	決算額
農学部活動援助費	200,000	200,000
一般事業費	2,650,000	2,388,995
一般事務費	800,000	522,397
会議費	150,000	71,880
旅費	60,000	32,650
慶弔費	200,000	235,460
神大学友会経費	90,000	100,000
雑費	20,000	0
予備費	98,225	0
学術振興基金	1,700,000	1,700,000
合計	5,968,225	5,251,382

監査の結果誤りのないことを認める。
昭和61年4月16日
切貫武代司 ㊞
久保一兵 ㊞

昭和61年度一般会計決算報告書
収支対照表

前年度繰越金	819,693	本年度支出金	3,947,538
本年度入金	4,431,840	次年度へ繰越	1,303,995
合計	5,251,533	合計	5,251,533

収入の部	予算額	決算額
前年度繰越金	819,693	819,693
入会金	4,200,000	4,380,000
預金利子	30,000	35,790
雑収入	5,000	16,050
合計	5,054,693	5,251,533

支出の部	予算額	決算額
農学部活動援助費	300,000	300,000
一般事業費	1,100,000	805,000
一般事務費	800,000	513,040
会議費	250,000	113,268
旅費	100,000	26,330
慶弔費	200,000	31,400
神大学友会経費	150,000	58,500
予備費	154,693	100,000
学術振興基金	2,000,000	2,000,000
合計	5,054,693	3,947,538

監査の結果誤りのないことを認める。
昭和62年4月17日
切貫武代司 ㊞
久保一兵 ㊞

昭和62年度六篠会学術振興基金決算報告書
収支対照表

前年度繰越金	19,499,020	本年度支出	50,000
本年度入金	2,659,613	次年度繰越	22,108,633
合計	22,158,633	合計	22,158,633

収入の部	予算額	決算額
前年度繰越金	19,499,020	19,499,020
一般会計より繰入れ	2,000,000	2,000,000
寄付金	1,000	0
預金利子	300,000	659,613
合計	21,800,020	22,158,633

支出の部	予算額	決算額
海外渡航援助費	500,000	50,000
予備費	500,000	0
保留金	20,800,020	−
合計	21,800,020	50,000

監査の結果誤りのないことを認める。
昭和63年4月12日
切貫武代司 ㊞
久保一兵 ㊞

昭和63年度六篠会学術振興基金決算報告書
収支対照表

前年度繰越金	22,108,633	本年度支出	1,500,000
本年度入金	3,188,849	次年度繰越	23,797,482
合計	25,297,482	合計	25,297,482

収入の部	予算額	決算額
前年度繰越金	22,108,633	22,108,633
一般会計より繰入れ	2,000,000	2,000,000
寄付金	1,000	0
預金利子	1,000,000	1,188,849
合計	25,109,633	25,297,482

支出の部	予算額	決算額
海外渡航援助費	500,000	0
予備費	500,000	0
一般会計へ貸し出し	1,500,000	1,500,000
保留金	22,609,633	−
合計	25,109,633	1,500,000

監査の結果誤りのないことを認める。
平成元年4月17日
切貫武代司 ㊞
久保一兵 ㊞